

英語科教育分科会

一、研究討議の要点

昨年度にひきつづき、「指導内容の精選」「教材の構造化」を中心テーマとして、本年度は次のような視点から討議が積みかさねられた。

(1) 「構造」ということばを、変遷する文法理論の立場から再吟味してみる。

「教材の構造化」を考えていく上で、伝統的な学校文法（School Grammar）に対する科学的・記述的な構造文法（Structural Grammar）としての「構造」をどう捉えるのか。さらには、その構造文法の行きづまりを批判する変形生成文法は、どのような変形規則を適用してすべての文構造を規定し記述していくのか。変形文法の成果が日本の英語教育に寄与する面は何か、など。科学的文法の研究手法や研究成果に絶えず注意を向けながら実用文法を教えていくという基本姿勢を確認しながら、Linguistic Description における「構造」の科学的・発展的配列に迫ろうとする研究方向がうち出されたことは大きな前進といえよう。

(2) 教材構造化のための言語理論を何に求めるか。

教材を見直し再編成していくための土台となる基本的な考え方に、変形文法理論を適用した実践研究は、すでに各地で試みられている。静岡大付属中の場合、その貴重な実践の記録を「変形文法と英語教育」(1970, 明治図書)にまとめて提供されているし、岩手大付属中の研究「英語の授業改造——変形文法と学習のアルゴリズム化」(1967, 明治図書)も深い示唆を与えるものである。深層構造→変形→表層構造という考え方によって、一見乱雑で無規則にみえる言語現象の裏面に秩序と規則性を見出させようとする指導の展開例は、構造化された教材自体に関連性・発展性をもたせ、生徒の言語生成能力を育成していくうえで重要な意義をもつものといえよう。こうした研究を手がかりとして、当分科会に於ても、変形文法を応用する際の学習心理学からみた問題点・生徒の学習能率・言語運用との関連など、生徒側の具体的なデータを集めながら、さらに時間をかけて慎重に検討を進めることが確認された。

(3) 授業システムの改善

教材の構造化は必然的に授業システムの改善につながっていく。特に、教育機器の導入は着実に授業のイメージを変容させつつある現状である。Audio-Visual Education の Theory を探究しながら、学部側ではLL教室の運用、付属校側ではプログラミングの問題・指導形態や指導過程の研究をととして、「授業の科学」確立へ共同研究の歩みを続けていく計画である。

① LL

本年度学部には18ブースの小規模ながら、待望のフル・ラボが完成した。現在のような情報化時代に生きる学生が、少くとも外国語の音声面に於て、まわりに堆積されている情報を効率的にとり入れる能力を、これによって大いに伸展させることができるよう、当分科会としてもその運用

に最善を期していきたい。と同時に、教育機器と教育システム、教育機器に対する人間工学的検討など、今後の研究課題も山積している。

⑥ プログラミングの研究

付属校におけるプログラミング研究も着々と進められている。他教科と違って英語科の場合、学習そのものが言語であり、母国語との関連・言語活動による運用能力の育成など、プログラム化する際の制約が多く横たわっている。従って、単なる素材言語の分析・配列にとどまらず、広く学習活動全般にわたって視野を広げ、situation を重視したプログラミングを研究し、個々の学習者の個人差に応じた学習の進歩を期待していこうとしている。

以上のような研究討議は、すべて付属校における実演授業をふみ台にしてなされたものであることを付記しておきたい。関連諸科学の総合的理論を構築することと併行して、教室における実験検証が継続的になされてこそ、現代化、科学化を旨とする英語教育の学問的性格が樹立されるものと信ずるからである。以下は付属校側からの報告にゆずりたい。

(英文研究室 仁平有孝)

二、授業実践を通して

系統性・難易度・興味ある内容とを基本的観点として精選された言語材料を用いて、英語の知識だけでなく、運用能力を身につけさせるためにはどのような方法で、どのような指導過程をとったらより効果的であるか検討を進めてきた。

(一) 学習指導法に対する基本的な考え方

(1) 英語科の学習指導の目標に沿った指導法

英語科の総括的目標と各学年の目標および内容の研究

(2) 日本の英語教育に沿った指導法

英語と語族・語系の全く違っている日本語を身につけている中学生の実態に即して指導法を研究すべきであり、*~ method* という一つの固定した指導法のみを追うのは賢明ではない。

(3) 個人差に応じた指導法

新しい指導要領でも強く求められているように能力差に応じた指導を自然学級の中で配慮したい。

(4) 反復練習をさせるための指導

生徒は忘れるものであるという事実を目をむけ、音声・語・連語・文・句型・文法事項・文字符号などさまざまな内容をもつ言語材料に関し、反復練習というテクニックをただ無計画に実施するのではなく、年間指導計画に組みこんで、絶えずある隔りをもちながら確実に実施したい。

(5) 積み重ねの指導法

断片的なものでなく、連続的、発展的なものでなければならない。既習のものとの関連において、積み重ねていく配慮が必要である。

(6) 興味をわかせる指導法

原則的なteaching procedureは守らなければならないが、紋切り型の指導に終始しては効果は期待できない。チャートや絵画・レコードやテープレコーダーなどの視聴覚教具の利用と共に変化をもたせた授業時間でありたい。

(二) 練習を主とした学習指導

Recognition の段階で満足すべき言語材料と Production の段階まで期待する言語材料の区別は明確にしておくことは勿論であるが、基本的には言語の修得は言語習慣の形成であり、理解のみでは習慣の形成には至らない。正しい理解と、これに伴う反復練習 (drill) によって正しい言語習慣が形成されていくという事実を忘れてはならない。

(1) 機械的反復練習の効率

言語修得はRepetitionによってこそ可能になるとしても単にConversionやSubstitution drillを徹底させるだけでは効果はうすい。生きた文型の練習になるよう Situation を充分配慮した chart drillなどを工夫すべきである。

(2) 一斉練習から個別化の方向へ

能力差を考慮しない一斉指導は教育の場ではありえない。しかし個別への配慮は充分としても、全員が等しく教材を理解できるものではない。教材の精選と相まって、ひとりひとりの生徒の学力を正しく把握し、特定の生徒がいつまでも、同じ誤りを続けることのないよう指導したい。

(三) 一時間の授業過程

生徒の学習段階や教材の難易、その時間の指導目標などによって固定していないが、普通の指導課程は

(1) Greeting

(2) Review

- Test questions and answers
- Recitation ● Pattern Practice
- Reading with comprehension ● Oral (Written) compositionなど

(3) New Materials

1. Oral introductionまたはOral presentation
2. Practice (Pattern practice, Chart drill など)
3. Pronunciation drill
4. Model reading 5. Translation
6. Reading (Chorus, Individual, Free)
7. Explanation

(4) Consolidation

- Written composition ● Reading with comprehension
- Questions and answersなど

特に指導にあたって留意している点

- (1) 文型練習はできるだけスピーディに効率的に行なうため、既習語を系統的に用意する。
- (2) Situation の中で文型が反復練習されるよう Chart を利用する。
- (3) 内容を理解しないで読んでも効率は低いので読みよりも内容理解を先行する。
- (4) Translation は内容理解の手段なので、日問日答によったり、ポーズごとに意味をとらせたりする。
- (5) 文型中心指導は結果的に短文の定着には役立つが、それぞれ分離した状態の理解にとどまり、長文読解への応用に欠けるうらみがあるという反省から、内容のある英文を読ませ、大意把握の習慣をつける。

(四) 今後の課題

指導内容や過程の構造的な把握、効果的な指導形態・評価などの研究を、教科教育法教官の助言を受け、進めていきたい。

(附属中学校 鬼沢正昭)